



TITLE:

大学教養教育における学生の教育 ・学習観の記述と析出に関する研 究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

辻, 高明

CITATION:

辻, 高明. 大学教養教育における学生の教育・学習観の記述と析出に関する研究. 京都大学, 2018, 博士(情報学)

ISSUE DATE:

2018-03-26

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r13185>

RIGHT:

許諾条件により本文は2019-02-28に公開

(続紙 1)

京都大学	博士（情報学）	氏名	辻 高明
論文題目	大学教養教育における学生の教育・学習観の記述と析出に関する研究		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、大学教養教育における学生の学習観の記述と教育観の析出に関する実践研究の成果をまとめたものであり、以下の6章から構成される。</p> <p>第1章は序論であり、本研究の背景や目的、先行研究をまとめている。研究の背景として、近年の大学教養教育において学生の高校から大学への円滑な移行を促し、実践的な学習や協働的な学習への適応を支援する教育が重要であると述べている。先行研究については、高校で習得する知識や技能の不足を補完する研究が中心であり、大学入学後の学生の学習観の形成に関する研究が行われていないと指摘している。さらに、教養教育の質保証のために学生の教育観を析出する方法の開発が必要であると述べている。</p> <p>第2、3章は、学生の学習観の記述に関する研究である。</p> <p>第2章では、学生が実践的に学習することの意義や価値を認識していく過程を記述している。教養教育では、学生が高校までに形成してきた学習観を、大学入学後の実践的な学習を通じていかに変容させるかが課題である。本研究では、学生が、他者との相互行為や状況要因との関係から学習観を変容させる過程を、状況的学習論に依拠したエスノグラフィを用いて記述している。具体的には、日本と米国の大学による英語を用いた遠隔協同授業を対象とし、参与観察により得られたデータをもとに、学生が実践的に英語を使用していく過程を記述している。そして、日本側学生は受験文化とも呼ぶべき学習観を有しており、米国側学生の実践文化とも呼ぶべき利用中心の学習観との間にコンフリクトを覚えることを指摘している。また、米国側学生と円滑にコミュニケーションが行える者は、米国側学生の語彙パターンというリソースを利用して英文を作成するようになることで実践文化に近い学習観を持つに至るが、そうでない者は、翻訳サイトというリソースを利用して英文を作成し、学習観は受験文化から変容しないことを示している。</p> <p>第3章では、学生が協働の意義や価値を学習していく過程を記述している。教養教育では、制作活動を伴う授業において、学生が協働の意義や価値を学習する過程が明らかにされていない。本研究では、制作活動における他者との関係の変化や、集団の活動形態の再編に着目し、活動理論に依拠したエスノグラフィを用いて、学生が協働することの意義や価値を認識していく過程を記述している。具体的には、国内大学における制作授業の参与観察を行っている。映像作品制作の事例では、個人が抱えていた編集用機材の使用の困難さに伴う問題を、メンバー間の役割分担の再編やグループ内の規範の見直しによって解決する過程を観察している。教材制作の事例では、グループリーダーの振る舞いと自分が求めるリーダー像との乖離に葛藤を抱える学生が、上級生の助言を得てリーダーの振る舞いを受容し、その指示に応じて制作に参加するよう変化した過程を観察している。そして、学生が、学習とは、知識や技術を獲得するだけでなく、自らが変わり他者との関係をも変化させることであるとの学習観を獲得することを示している。</p>			

第4、5章は学生の教育観の析出に関する研究である。学び手の立場を超えて、学生がどのような大学教育を求めているかを考えるアクティブラーニングを設計し、学生が持つ教育観を析出している。

第4章では、大学の授業に着目し、実践を通じて学生の教育観を析出している。現在、授業評価アンケートの結果から授業に対する学生の満足度を知ることはできるものの、大学の授業について学生が何を重視し、どのような授業に価値を置いているかを把握する方法に欠いている。そこで本研究では、学生の授業を選ぶという行為から教育観を析出するための、要求指向のアクティブラーニングを設計している。具体的には、国内大学の教養教育科目において、学生が授業を推薦し、賛同した学生が投票する実践を設計し、学生が推薦・投票する授業として選んだ理由を述べることを通じて、学生の教育観を析出している。そして、学生は、体験型学習に価値を置いていること、授業の内容よりも授業の方法に価値を置いていること、仕事や生活に有益な授業を求める一方、単位取得の容易さには価値を置いていないことを明らかにしている。

第5章では、大学教育全般に着目し、実践を通じて学生の教育観を析出している。教育の質保証へ学生が参加することの必要性は指摘されているものの、アンケートへの回答などの受身的な経験しか有さない学生にとって、大学教育に対する意見や考えを構築することは困難である。本研究では、個人検討、集団内検討、集団間検討により、大学教育への意見や考えを析出する、解決指向のアクティブラーニングを設計している。具体的には、国内大学の教養教育科目において、教育再生実行会議の提言や中央教育審議会の答申を用いた討論の実践を設計し、学生の教育観を析出している。そして、個人によるシートの作成、グループ内での提案書の作成、グループ間でのネゴシエーションやディベートの実施という3ステップを設けることにより、学生が大学教育の問題点や解決策を提案できることを示している。

第6章は本論文の結論であり、本研究で得られた成果を要約している。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入する場合は、400～1,100 wordsで作成し
審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、大学教養教育における学生の学習観の記述と教育観の析出に関する実践研究の成果をまとめたものであり、得られた主要な成果は以下の通りである。

1. 高校までに形成された学習観を、学生が大学入学後の実践的な学習によって変容させていく過程を、状況的学習論に依拠したエスノグラフィを用いて記述している。日米間の遠隔授業における英語学習を例とし、日本側学生が、自らの受験文化とも呼ぶべき学習観と、米国側学生の実践文化とも呼ぶべき利用中心の学習観との間にコンフリクトを覚えること、また、英文の作成において、米国側学生の語彙パターンの利用を通じて、実践文化の学習観を獲得していくことを明らかにしている。
2. 学生が大学入学後の実践的な学習を通じて、協働の意義や価値を理解していく過程を、活動理論に依拠したエスノグラフィを用いて記述している。制作活動を伴う授業を例とし、学生が、個人では解決できない問題を、集団の活動形態の転換や他者との関係の変化を通して解決することにより、学習とは、自らが変わるとともに、他者との関係をも変えることであるとの学習観を獲得することを明らかにしている。
3. 大学教育の授業に着目し、学生の教育観を、授業を選ぶという行為から析出する要求指向のアクティブラーニングを設計している。そして、学生が、体験中心型の授業や仕事・生活に有益な授業を重視していること、また、授業の内容よりも授業の方法に価値を置く一方で、単位取得の容易さには価値を置いていないことなどを析出することに成功している。
4. 授業以外の大学教育全般について、学生の大学教育への考えや意見を析出するための解決指向のアクティブラーニングを設計している。そして、学生が個人、集団内、集団間という3ステップでの検討を通じて、個人の考えや意見を共有、比較、連結し、大学教育のあり方を提案させることに成功している。

以上、本論文は、大学教養教育を対象に、学生の学習観の変容過程を詳細に記述すると共に、学生がどのような大学教育を求めているかを考えるアクティブラーニングを設計し、学生の持つ教育観を析出したものであり、学術上、實際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士（情報学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成30年2月19日に論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果、合格と認めた。

注) 論文審査の結果の要旨の結句には、学位論文の審査についての認定を明記すること。更に、試問の結果の要旨（例えば「平成 年 月 日論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果合格と認めた。」）を付け加えること。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公開可能とする日付を記入すること。
要旨公開可能日： 年 月 日以降